出典：「光の泉」2008年3月号

人生が語りかける声を聴くために

人生のさまざまな逆境のなかで、私たちは、「なぜ、こんなことが自分に起こったのか」と戸惑い、「どうしたら、ここから抜け出せるのか」と、もがき続けることがある。しかし、その出来事の意味がわかったとき、また一つ成長した自分が見えてくる――。「人間として『成長』し続けることこそが『人生の成功』である」と語る田坂広志さんに、逆境の意味するものについてお聞きした。

田坂広志さん　多摩大学大学院教授
シンクタンク・ソフィアバンク代表

――ご著書の『人生の成功とは何か』のなかで、人は成熟するにしたがって、「勝者の思想」から「達成の思想」へ、さらには「成長の思想」へと深化していくと述べられていますが、ご自身がやはりその道筋をたどられたということでしょうか。

田坂　そうですね。世の多くの人々は、しばしば「財産を築く」ことや「地位や名声を得る」ことを人生の成功と考えます。しかし、「人生の成功とは何か」を考えるとき、アメリカの初等教育において子どもたちに投げかける、二つの問いを思い起こすべきでしょう。

一つは、Define your own success.（あなた自身の「成功」を定義しなさい）。そして、もう一つは、Find your own uniqueness.（あなた自身の「個性」を発見しなさい）。その二つの問いです。

「自分は、どのような人生を生きたとき、その人生を成功だったと思えるのか」という問いを考えないままに歩んでいくと、世の中の通俗的な「人生の成功」の定義によって自分の人生を判断してしまう。そこに、大きな不幸の原因があるのです。

そして、もし本当に私たちが、自分自身の「人生の成功」の意味を考えたいのであれば、その前に「自分の個性」というもの、つまりあなたにとっての「自分らしさ」とは何かを見いださなければならないのです。

私自身、生死の体験をさせていただいた時期に、何をもって自分を支えていくのかを苦悩し、たどりついたのが、「成長の思想」だったのです。

しかし、日本では、受験教育や偏差値教育によって、子どもの頃から人との競争が求められます。そうした過程で、人との競争に勝つことが人生の成功につながる、という考え方が刷り込まれてしまうのです。そして、社会に出れば、そこにも「勝ち組」「負け組」という言葉が溢れています。政府は、社会の生産性をあげるために構造改革を進め、市場原理が導入され、「競争が社会を良くする」という競争原理の思想が世の中に広く浸透しています。

私自身も、この「勝者の思想」という成功観に影響を受けた時代はありました。しかし、少し考えればわかるように、誰もが勝者をめざす社会において、誰もが勝者になれるわけではない。むしろ敗者の方が圧倒的に多い。つまり、他人との競争に勝つことが人生の成功だという思想には、大きな落し穴があることに気がつくのです。

では、競争に敗れ去ったとき、自らを支え、自らの人生を肯定できる思想とは、何か。そのことを考えるとき、次の段階が見えてきます。誰か他人との競争に勝つことよりも、自分が掲げた目標を達成することを、人生の成功とする思想です。言葉を換えれば、「他人との戦い」ではなく、「自分との戦い」に意義を見出す思想です。

この思想を抱くとき、私たちの中から「個性の輝き」が出てくる。人生において掲げ得る目標は多様であり、たとえば、ヨットで世界一周をしたいということでもいいし、NPOで環境運動をしたいということでもいい、老人介護のビジネスを立ち上げたいということでもいい。そうした目標を掲げ、その実現のために努力するとき、

特集　逆境から学ぶ

聞き手／西尾慎也（本誌）　撮影／堀　隆弘

そこに、人生の喜びや生き甲斐が生まれてくる。そして、多くの人々の精神は、成熟するにしたがって、この「達成の思想」に向かっていくのですね。

ところが、よく考えてみれば、この達成の思想にも限界がある。なぜなら、誰もが、その人生において自分の目標を達成できるわけではないからです。自分はこれから十年をかけて、この目標を達成すると決意したとしても、じつは、いつ自分の人生が終わるかは、分からない。もしかしたら一年後に、病気や事故でこの生が終わるかもしれない。それが人生の真実です。

もとより、「達成の思想」は「勝者の思想」に比べれば、よほど成熟した思想ですが、その思想で救われない人々がいるのも事実です。たとえば、志なかばで大病に倒れた人々は、この達成の思想では救われない。自分の命がいつ終わるかわからないという人生の現実を目の前に突きつけられると、将来の目標や夢などは吹き飛んでしまう。

じつは、私自身、そうした生死の体験をさせていただきました。その時期に、何をもって自分を支えていくのかを苦悩し、たどりついたのが、「成長の思想」だったのです。

今日という一日を、恐怖心のために失うことはしない。今日という一日を、精一杯の思いで生きよう。感謝の心で生きよう。そう覚悟したのです。

――ご本には書かれていませんが、それはいつ頃のお話ですか。

田坂　私は、自身の生死の体験は、あまり語らないのですが、三十二歳のとき、大病を得て、医者からは、あまり長い命ではないとの診断を受けました。そのときの経験は、まさに、足元が崩れ落ち、目の前が真っ暗になるという経験でした。夜中に目が覚め、悪夢のような現実に苦しむという日々を過ごしました。しかし、その苦しみの中で、最後に私は、医療には頼らないという道を選びました。その病の場合には、死の恐怖に怯え、医者と薬に頼り、心が弱くなり、急速に衰弱していく例が多かったのです。だから、「自分の生命力で治す」と、覚悟したのです。

それからは何年間も、その病の恐怖との闘いでした。そして、それまで意欲的に未来の夢や目標を持っていた人間が、その未来を失ったとき、たどりついたのが、この「成長の思想」でした。いつ死ぬかわからない。そうであるならば、いのち尽きるその瞬間まで、人間として成長しよう。与えられた一日を精一杯に生き切ろう。そして、少しでも成長しよう。その生き方ができたなら、それでよい。悔いはない。

私は、そう心に定めたのです。

――病気の自覚症状も、当然あったわけですね。

田坂　ありました。特に症状が出るときには、自分の生命力を信じるといっても、実際には難しい。なぜなら、自分の生命力を信じようと思えば思うほど、逆に、それに対する疑念や不安が大きくなってくるからです。人間の心とは、プラスの電荷を心の表面に無理に引き出すと、逆に、マイナスの電荷が心の奥深くに増えていくのですね。どれほど表面意識で「絶対に治る」と思っても、それと同じだけ「いや、治らないかもしれない」という思いが潜在意識に生まれてくるのです。

「人生における『逆境』とは、自らの可能性を拓き、成長していくための素晴らしい機会なのです」

その根本にあるのは「恐怖心」です。恐怖心が生命力を萎縮させてしまう。宗教的な修行でも、恐怖心を捨てるということがよく言われますが、これが難しい。しかし、その葛藤のどん底で、ある禅僧の一言に、救われました。

「人間、死ぬまで、命はある」

その通りなのです。どれほどの大病といっても、まだ命がある。まだ生きている。それにもかかわらず、自分は、すでに心が死んでいる。そのことに気がついたのです。「自分の命はもう長くない」「いつ終わりがやってくるか」と恐怖心に怯え、すでに心が死んでしまっていた。しかし、気がついたのです。たとえ明日死ぬとしても、まだ今日の命は与えられている。

されば、この今日という一日を、恐怖心のために失うことはしない。今日という一日を、精一杯の思いで生きよう。感謝の心で生きよう。そう覚悟したのです。その覚悟を支えたのは、禅僧が語った、もう一つの言葉でした。

「過去はない。未来もない。

あるのは、永遠に続く、今だけだ。

今を生きよ。今を生き切れ」

そう腹をすえたとき、しだいに恐怖心が消えていき、その恐怖心と表裏一体の「病気を克服したい」という思いもまた、消えていきました。そして、不思議なことに、そのとき自らの内から、生命力が湧き上がってきたのです。そして、その覚悟で一年たち、二年たつうちに、心が強くなってきて、気がついたら、病も去っていました。

――死ぬかもしれないという体験は、最大の逆境といっていいでしょうね。

田坂　そうですね。そして、その最大の逆境を体験すると、人間は強くなります。私にとって、その後の人生では、大半のことは苦労でもなんでもない。死ぬと思っていた命が、こうして生かされている。どれほど辛いことがあっても、「命あるだけ、有り難い」と思えるのです。戦後の優れた経営者に、大病や戦争で生死の体験をされた方々が多いのは、人生の逆境を逆境とは思わない強さがあるからでしょう。

つまり、逆境とは、人間にとって最大の「成長の機会」なのです。勝者の思想や、達成の思想を抱くかぎり、逆境とは、否定的な出来事です。しかし、成長の思想においては、逆です。なぜなら、人が大きく成長するのは、

「人間の成長とは、『相手の心』『集団の心』『自分の心』という三つ心の世界が見えるようになることです」

私たちの人生の真の目的である「今を生き切る」ために、「成長し続ける」ためにこそ、夢や志を抱き、語るべきなのです。

び、成長せよと言っているのか、その「意味」が必ずわかってきます。

――「夢」や「志」を持つものだけに聞こえてくる「声」がある、とおっしゃっていますけれども……。

田坂　私が申し上げるのは、達成の思想における「夢」や「志」ではありません。「夢」や「志」があるからこそ、私たちは今日一日を、精一杯に生き切ることができる。そして、遠くに見つめているものがあるからこそ、目の前の苦労や困難を自分の成長の糧にしていくことができる。その意味で、「夢」や「志」とは、いわば成長の思想における成長の方法なのです。私たちの人生の真の目的である「今を生き切る」ために、「成長し続ける」ためにこそ、夢や志を抱き、語るべきなのです。

人生において、何かが達成されるというのは、精一杯に生き切ったことに対して、天が与える余禄です。今日一日を、感謝に満たされ、幸福な気持ちで、輝きながら生き切ることができたとすれば、すでに私たちは充分に報われている。しかし、そのとき不思議なことに、心の奥深くから、自分の人生を導く「声」が聴こえてくるのですね。

――人間の成長とは、「心の世界が見えてくること」であると……。

田坂　成長という言葉を抽象的に使うと、「自分は成長した」という自己幻想に陥ってしまいます。もし、私たちが本当に成長したとすれば、前よりも「心の世界」が見えるようになっているはずです。その心の世界は、三つあります。「相手の心」「集団の心」「自分の心」です。ビジネスにおいても、「相手の心」の細やかな動きに気づき、無言の声が聞き取れるようになれば、それは成長したことの証です。次に、リーダーになって求められるのが、「集団の心」が見えることです。職場の空気や雰囲気の変化を感じとることが、順風満帆のときではなく、苦労や失敗や挫折といった人生の困難に直面したときだからです。逆境とは、人間成長の好機であり、天が自分という人間の可能性を引き出そうとしてくれる、有り難い配剤である。そう覚悟を定め、その出来事が自分に語りかける「声」に虚心に耳を傾けるならば、その出来事が自分に、いま何を学びとることができるようになれば、それも成長の証です。

そして最も難しいのが、「自分の心」が見えるようになること。なぜなら、それは、心の奥深くの潜在意識のことだからです。一つは、自分の心の奥のエゴの動きです。私たちは、そのエゴに操られながら、その動きに気づきません。もう一つは、心の奥深くにある本当の自分の声です。しかし、私たちが腹をすえ、今を生き切るようになると、自分のエゴの動きが見えるようになってくる。そして、自分の心の奥深くから、人生を導く「声」も聴こえるようになってきます。

しかし、この潜在意識の世界への処し方は非常に難しい。なぜなら、それは、「私とは何か」という深いテーマとも関わってくるからです。たとえば、潜在意識というものは、「潜在意識にこう働きかければこうなる」というように操作主義的にとらえると、必ず裏切られます。では、この潜在意識に対する最も良い処し方は、何か。敢えて言えば、「無邪気」ということです。

無邪気とは、是非善悪の区別の無い状態です。先ほどの喩えでは、プラスとマイナスの電荷が分離して存在していない心の状態です。しかし、私たちは、心のなかに、いつも分離と対立をつくってしまう。善悪、愛憎、自他、生死というように、分離と対立をつくった瞬間、その境界で葛藤が起こり、不安や恐怖が生まれてくる。それが、宗教的な意味でいう、「迷い」なのです。

しかし、二つに別れ、対立していると思っていたものが、本来、一つであることに気づくとき、それを「和解」と呼ぶ。そのとき、さまざまな葛藤が消え、不安や恐怖心も消える。宗教的な修行の目的とは、究極、良寛禅師のごとく、こうした幼子の心のような無邪気さにもどっていくことなのです。

そして、その和解をするとき、私たちは、大いなるものに生かされていることに気づき、多くのものが与えられていることに気づく。そして、そのことへの感謝の念が深まるほど、ますます、その大いなるものに導かれるようになります。

なぜなら、その大いなるものとは、本来、自分と一体の、何かだからです。

●たさか　ひろし　昭和26年（1951）生まれ。東京大学工学部卒業。東京大学大学院修了。工学博士。米国シンクタンク・バテル記念研究所客員研究員を経て、平成2年、日本総合研究所の設立に参画。同社取締役を経て、12年、シンクタンク・ソフィアバンクを設立し、代表に就任。同年、多摩大学大学院教授に就任。13年より、21世紀の新しい生き方と働き方を学ぶコミュニティ、「未来からの風フォーラム」を主宰。18年、シンクタンクとしては初の試みである、ネットラジオ局、「ソフィアバンク・ラジオ・ステーション」を開局。公式サイトアドレス http://hiroshitasaka.jp 主な著書に、『なぜ働くのか』『人生の成功とは何か』『なぜ、我々はマネジメントの道を歩むのか』（以上、PHP研究所）、『未来を拓く君たちへ』（くもん出版）など。